つながりを永遠に

～日本赤十字社が結んだ絆～

vol.6 全7回

ナンブ水産（石巻市万石町）代表 南部武彦さん（54）

「世界はつながっているんだと思いました」

南部さんのメッセージを動画でも公開中

取材時の様子を短編の動画にまとめました。右の２次元コードからアクセスしてください。

東日本大震災で日本赤十字社が実施した被災地支援の後日談を追う連載。今回は津波で壊滅的被害を受けたノリ養殖を、クウェートからの資金援助も得て再興したナンブ水産（石巻市）代表南部武彦さん（54）にスポットを当てます。

ノリ養殖　クウェートの支援で再起

1月下旬、まだ真っ暗闇の朝6時、南部さんは自ら舵を取り、船を漁場へと走らせた。この日向かったのは石巻港の沖約2キロに設置した養殖いかだ。約15分で現場に着くと、海中では約1カ月半前に種付けをしたノリが海の養分と太陽の光を得て長さ20センチほどにまで生長していた。

同船した従業員3人と一緒に網を船上に巻き上げ、1時間足らずで約2400キロを収穫。すぐに陸の加工場に取って返し、洗浄から成型、乾燥に至る約3時間半の機械加工と目視による丁寧な検品を経て、黒々とした自慢の板のり「みちのく寒流のり」は完成した。

板のり10枚を二つ折りにし、それを10束ずつまとめて出荷する。記された生産者名にプライドが宿る

「今年は水温が低くて生育が少し遅れ気味でしたが、出来はいいですよ。石巻のおいしいのりを、あの時助けてくれた全国、世界の皆さんに食べてもらいたいですね」。震災から10年、その表情はいま、自信とやりがいに満ちていた。

津波で万石浦沿いにあった工場も自宅も、沖合に構えていた養殖のいかだも、すべてを失った。小学生のころから手伝い、親から継いだ家業もこれまでか―。「人生が終わった」と思った。被災から半年は何をする気も起きなかった。

その年の夏、いかだやロープなどの養殖資材の購入が補助されることが決まった。しかしそれでも、肝心のノリの種を仕入れる資金にめどが立たず、不安は消せなかった。

そんな時、「クウェートが助けてくれる」との情報が舞い込んだ。「最初は『聞いたことはあるけど、どの辺の国？』って感じ。徐々に具体的な内容が分かるにつれて、『世界はつながっているんだ』という不思議な気持ちになりました」。南部さんを含め石巻市漁業協同組合加盟の16のノリ養殖事業者に対して、種の購入費として贈られたのは計960万円。それは文字通り、再起の確かな種となった。

今回の震災でクウェート政府は日本に原油500万バレル、金額にして約400億円を支援した。託された日赤は岩手、宮城、福島の被災3県の復興支援に充当。水産業だけでなく、鉄道の復旧や中小企業の復興助成、医師確保のための修学基金の設立など多様な分野に用いて、被災地の再起を後押しした。

南部さんはクウェートの支援に希望をもらい、2012年にノリ養殖を再開。13年には工場も再建し、今は5人を雇う。出荷は縦21センチ、横19センチの板のりに換算して、震災前の年間約450万枚を上回る550万枚前後に飛躍。売り上げも、コンビニおにぎりの需要の高まりなどから相場が上がっていることもあり、震災前をしのぐまでになった。

南部さんは「生きる希望をもらった」と遠国クウェートの支援に改めて感謝しつつ、「機会があれば俺ののりを食べてほしいね。『黒い紙』が、お口に合うかは分かりませんけどね」とおどけた。

自慢ののりを手に笑顔を見せる南部さん。「いつかクウェートに御礼に行ってみたいなあ」＝2021年1月下旬、石巻市万石町

企画・制作/河北新報社営業部